

幸福と経済学

千葉大学法政経済学部教授

石戸 光

続きまして私の方からお話をさせていただきたいと思います。今日は政治系のみなさんもたくさんおられるということと、公共学会ということでもあり、その意味で役立つ話にならないかと思って考えてきました。私自身は経済学研究です。しかし経済は政治との関係がものすごく深いものですので、その意味でこの講演会を通して勉強して行ってほしいと思います。

そもそもの経済学のあり方

幸福と政治経済、世を経て民を済ます、経世済民と書いてありますが、別の読み方では、世を経(おさ)め民を済(すく)うとなります。世の中を治めて人々を救う、みなさんがお腹いっぱいになれるために世を治める、これが経済の意味で、それは政治と密接に関わるわけです。訳の仕方はともかくとして、経済とは世の中全体を通じて人々を満ち足りた状態にするということがいちばん大きな課題です。これは中国の古典から取った言葉ですが、今でもそれは生きているのではないかと思います。(図1)

ただみなさんが経済学と聞くと、この部屋でもなんとか経済学入門やいろいろな経済関連の講義がされるわけですが、そこには本当に世を治めて民を救うということ以上に、難しい数学が出てくるかもしれません。今の経済学はわりとそのような部分が強くなっていますが、元々経済学は political economy 政治経済と呼ばれて、これは社会全体の幸福を目指すそういった学問として成立した。そして幸福 happiness というのは開発 (development)、先ほどの小林先生のお話にもありましたが、厚生 (welfare や well-being) というようなこ

図 1

幸福と政治経済

- 経世済民(世を経て民を済ます→世の中を通じて人々を満ち足りた状態にする)
経済学はPolitical Economy (政治経済)と呼ばれ、社会全体の幸福を目指す学問として成立。
- そして、「幸福」(Happiness)とは「開発」(Development)、「厚生」(Welfare, Wellbeing)と同じような意味合いを持っているため、以下では同義的に用いる。
- ここでは、地球規模の幸福(開発)がどのようにもたらされるべきか、考えたい。特に「貿易」を通じた社会の幸福達成を焦点に。

とと同じ意味合いを持っているということで、同じようなものとしてここでは考えていきたいと思います。

それから、ここでは地球規模の幸福、開発がどのようにもたらされるべきかということを考えてみます。特に私自身は貿易の専門ですので、その分野から幸福を考えるとどうなっていくかという話になっています。みなさんの中に経済学を勉強した方はいますか。これは開発の様子としてここに式がありますが、 $Y=C+I+G+X-M$ と書いてあります。これを覚えておくとマクロ経済学では5点くらいはまず取れます(笑)。その後にはまだたくさん勉強しないとイケませんが、これは出発点 GDP のことを Y 、 Y は yield 収穫、経済でいう収穫物は GDP というので、今年収穫されたバナナや生産された車の合計、そのような意味です。「 C 消費 + I 投資 + G 政府支出 + X 輸出 - M 輸入」。今の経済学が主に語っているのは、この $Y=C+I+G+X-M$ を大きくしましようという話です。(図 2)

今の経済学はこれを出発点にしています、というお話もしておかなくてはいけないと思いますが、そこからだんだん幸福論にいけますが、条件が整えば、貿易 trade あるいは business と言ってもいいですが、それは途上国の経済開発を促進する要素になるのです。だから貿易は大事ですという話を私はよくします。ただし条件が整わないと開発がなされない、ただ開国しただけでは

図2

貿易(国を超えた交換)と開発

- 開発の様子:
社会全体の供給=社会全体の需要
が拡大していくこと(幸福はもちろん物質的な)
- 式では $Y=C+I+G+X-M$
GDP=消費+投資+政府支出+輸出-輸入
- 条件が整えば、貿易(トレード、広義にはビジネス活動の拡大)は途上国の経済開発を促進する主要素となる。→条件が整わないと開国は開発を阻害する可能性もある。→「フェアなトレード」の必要性。

開発が阻害される、国内経済がむしろ外国からの輸入でやられてしまい、幸福でなくなるのではないかというお話です。そこから、みなさん聞いたことがありますか、フェアトレード fair trade というような議論が今出てきています。

これはもうご存知のこととも思いますので、先ほどもいいましたが、貿易を通じた開発の様子はこのようになっています。ビジュアルに言えば、要するに $Y=C+I+G+X-M$ がどんどん大きくなっていく、これが経済発展で、日本や東アジア諸国でも起きました。特に貿易に注目するとすれば、貿易を自由化することでたくさん輸出して得られたお金でたくさん輸入して、おいしいバナナはフィリピンから買う、パイナップルもフィリピンから買う、自動車は逆にフィリピンにも、またアメリカにも輸出しますし、というように、これは基本的に物の世界のお話です。まだ物の世界の話をしています。貿易と開発をめぐる論点、このようなことを WTO 世界貿易機関がなるべく Yつまり GDP を大きくしなくてはということで、自由化をすると貿易がますます大きくなって、Yつまり GDP が大きくなることに繋がるということです。途上国もそれをしてほしいです。そして WTO のドーハ開発アジェンダとって、途上国の開発のために貿易を自由化しようという議論がありますが、これがなかなかうまくいっていない状況です。

TPP と幸福

このような前提の話を知っていただきましたが、途上国では policy space 政策空間がなかなか確保できない、つまり自由化自由化といわれてしまうと、もう自由化という方向しか残っていないことになります。国内の雇用対策やこの産業は残していきたい、という政策の自由がない。日本でも最近 TPP が大筋合意されましたが、私は今どのように良い社会を TPP の後の日本で作っていくかという研究チームに入っています。途上国にも同様の心配がある。日本にも心理的危惧がある。みなさんが知っていると思う話としては、フェアトレード、これは幸福ということと実はかなり絡むお話です。

数年前にインドのケララ州というところにある修道院付属の服飾工芸品製作所に行ってきました。ケララ州はインドの中でも珍しく、女性は早目に結婚して教育など要らない、という価値観がほとんどない。インドにはそのようなところがあり、早目に結婚して教育など女には要らない、という価値観がかなり幅を利かせていますが、インドのケララ州はそうではない。先ほど小林先生もお話されたアマルティア・センというインド出身の方もこの州に注目しています。

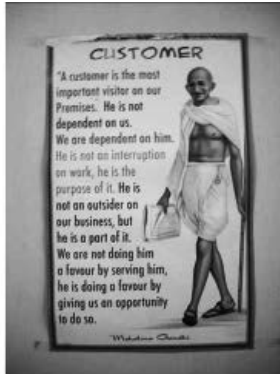
中ではどのようなことが起こっているのだろうか、ということで私も学生のみなさんと行ってみました。修道女の方がそこでもう 40 年、この活動をしています。農村の女性には教育はあまりないが手に職をつけることができれば、それを売ることによって自立することができる。旦那さんに頼るだけでなく、自立ができれば発言権もより高まります。私たちには教育が必要なのだということも声を上げて言うことができる。その意味でここを訪問してそこで服の購入もしました。これは 1 着 500 円くらいでした。私たちからすると安いですが、インドの人からすると高く買ってくれる。貿易はその間を取るところに売る側と買う側両者の happiness が絡んでいると私は思っています。(図 3)

またインド独立の父であるガンジーさんのことが掲示してあり、そこには「顧客ニーズを大事に」と書いてありました。(図 4) 彼はインド独立の父であり、いろいろな活動と哲学的思索もしましたが、これは非常に実践的に経営学的な話です、「顧客ニーズを大事にしましょう」と言っておられたのです。哲学と

図3



図4



↑ ガンジー：
「顧客ニーズを大事に」

↓ 製作された繊維製品



経済学・経営学は両立できると私は思いました。それを先進国の顧客、これは私の家族ですが、これを通してかなり幸福になっているわけですから、先進国の人も幸福感を味わえる。途上国のみなさんもこれは500円で売れてよかったと思えるのであれば、これは援助をするよりもむしろ貿易をする、つまりインドのこの人にお金をあげよう、援助をしようではなく、貿易ということでお互いに対等に幸福を味わえればそれがいいことではないかと私は思いました。

貿易研究と幸福

貿易研究の私としては、このようにインドのいろいろなところにも行きましたし、後でブータンにも触れますが、考え続けてきているわけです。マハトマ・ガンジーと非暴力的な貿易循環、ガンジーさんはこう言いました。「目には目をという考えがあります、目には目をという考えによっては世界中が盲目になってしまう」という言葉を残しています。つまりやられたらやり返せという行動原理、哲学であれば、みんなやられてしまう。目をやられたら目をやるので、全員盲目になってしまいます。

これはアヒンサー、非暴力という考え方、これが大事ですということです。決して彼は暴力を振るわずに態度で私たちはこのような圧制には従いません。植民化されても非暴力的に、アヒンサーという考え方で、インドの独立を成し遂げた方です。最期はこの方はピストルで撃たれて暗殺されてしまいます。しかしその意志をついでインドの独立が実際に果たされたということで、この方の哲学はインドに確かに生きている。やはりガンジーさんのような考えで貿易自由化もしなくては行けないと私は思いました。

WTOに戻りますと、GATTというWTOの条文には、最恵国待遇というものがあります。関税を安くしてもらったら私も安くするという、「目には目を」的な部分がかかり幅を利かせている。これはかなり「仕返しの」といったら大げさかもしれませんが、これをなるべくアヒンサー的な貿易に変換できないだろうかということを私は考えました。

貿易に関する定義などもそのような話から言いますと、今TPPなどがありますが、TPPで貿易をすれば、域外との貿易が減りかねない。いろいろな歪みが出る。しかし貿易量を減らさなくても、域内の厚生 happiness あるいは well-being を高める政策は存在するという定理も実はあります。というようなことで、私は今貿易を通じて happiness 的なことを研究しているわけですが、ここで、千葉にもフェアトレードのお店がありますとお話です。東金市にあるそのお店に行ってきましたら、フェアトレードグッズがいろいろ置いてありました。(図5) カフェルバーブ、ネパールのフェアトレードのコー

図5

千葉のフェア・トレード
千葉県東金市にある雑貨&カフェ「ルバープ」



千葉県東金市にある雑貨
&カフェ「ルバープ」
(いわゆるフェア・トレード
のお店)



ネパールのフェアトレード・
コーヒー

ヒーで、これはおいしかったです。みなさんもぜひこのような場所に足を運ばれたらいいのではないかと思います。単に商品がフェアトレードで売っているね、ということだけではなく、小林先生のお話で言いますと、やはり美徳の社会を作ろうという営みだと思えます。

つまり美徳がフェアトレードということで、なるべくフェアなビジネス、フェアなことをする事が実は私たちの社会にとって美徳に繋がります。そのようなことが生きがいです、楽しいですということでお店の方もやってらっしゃいました。お店ではいろいろな服も売ってました。今非常に問題になっているパレスチナからの服やオリーブオイル、チョコレートなども売られていました。チョコレートにまつわる、雇い主から虐げられた人の安く労働力を買われてしまった「苦い」お話（チョコレートの苦さとは違います）などの状況が書かれていました。

フェアトレードでは、なるべく高く買ってもらいたいです、という単に物の取引をしているという議論ではなく、フェアトレードは美徳のコミュニティということになるべく目指していこう、ということなのです。お店のクッキーもおいしかったです。またパレスチナを支援するオリーブオイルのフェアトレードも紹介されていました。カレーも紅茶も同様の意味で置いてありました。カ

レーもおいしかったです。ククレカレーもいいですが、南アジア系のネパールカレー、おいしかったです。入り口のドアには、「武器ではなく真実が宇宙でいちばん力強い」という標語が書いてあり、とても哲学的と言いますか、このフェアトレードの中には美德を求めていこうことがすごく感じられる。そんな社会をこれから作っていきませんか、というメッセージではないかと思います。

賀川豊彦の友愛の政治経済学

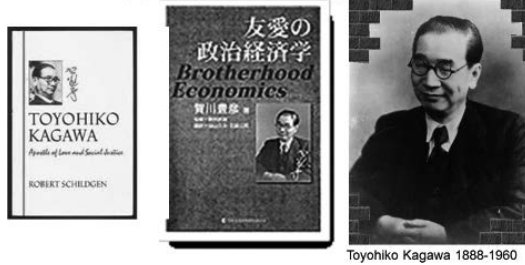
お話の角度を少し変えますが、みなさんは日本人の社会事業家、賀川豊彦を知っていますか。これも実は千葉大学で大事なテーマです。彼の著書に『友愛の政治経済学 brotherhood economics』があります。この方はキリスト教の牧師であり、社会事業家です。現在の農協や生活協同組合、大学内にもありますあの生協を日本にもたらした最初の方です。千葉大学で一生懸命この方の研究をしています。賀川が強調したのは経済的原因から戦争は発生するという点にかなり注目しました。なるべく自由な経済にすることで協同組合的な空間を作り、それで互恵的な協同組合で世界全体を友愛の経済空間にできないだろうかという議論をしたわけです。(図6)

経済の取引は単に儲けてやるぞ、ということではなく、相手に役立つ品物になるべく安く作ってお互いに交換するのだというスピリットが、実は協同組合 COOP に込められています。だからみなさん次回大学の生協に行かれたら、そうか COOP というのはそのような意味合いでそこにあるのだと思って下さい。単にお店があって8時半から開いているというだけではないというお話ということです。COOP 協同組合には、「ひとりでは万人のために、万人はひとりのために」という思想があります。そして価値ということ、自助、自己責任、民主主義、平等、公正、連帯という価値を大切にします。だから株主が大株主だったら発言権が大きいかということそうではない。フェアトレードもそのような側面がありますが、COOP も発言権はひとり1票です。

つまり大企業なら資本家が大株主で発言権があるが、そうではない。ひとりでは万人のために、万人はひとりのために、ということで、自発的に手を結んだ

図6

日本人の社会事業家・賀川豊彦
“Brotherhood Economics (友愛の経済学)”を知っていますか？



人々が共同で所有して民主的に管理する事業体で経済や社会や文化的なニーズと願いを叶えることを目的としている。その目的で千葉大生協もあるということです。そう思って今度生協を訪れていただくといいですね。これは自発的に開かれたなど規則を見ると確かにそのように書いてあります。それは国際的な運動にもなっていて、これもフェアトレードの一種であると思っております。

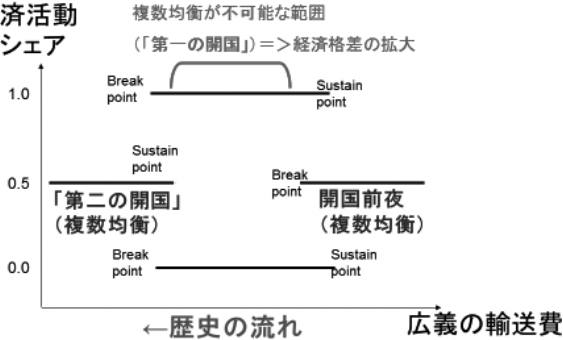
私は専門が貿易研究ですから、貿易をめぐる幸福や社会の厚生、コミュニティの在り方などを考えています。日本の協同組合の取り組みとしては、JAなどかがたくさんあります、それらはもともと賀川豊彦さんという人が提案して作られたものです。世界的にはスイスのジュネーブに協同組合の国際的本部があり、そのようなNGOが世界中でもっともっと育っていくことが必要だと思っております。

また別の角度から、貿易理論の話をしみますと、実は「比較優位」という言葉があります。①貿易を始めると比較優位で特化が進む。そして②得意なものを作ってそれで貿易をすればお互いに儲かる。これらがスムーズにいけばいいですが、TPPなども農業に日本の比較優位がなかったら疲弊してどうなっていくのだろう、という議論があります。このような観点もまた、大事なコミュニティの課題ではないかと思っております。

図7

貿易自由化(TPPによる「開国」)によって農村地域が開発されるシナリオ⇔「空間経済学」の「複数均衡」の可能性

経済活動
のシェア



一極集中ではない「複数均衡」的な開国を追求すべき

幸福の国ブータン、そして貿易理論で農村を考える

さらに話題が変わりますが、「幸福の国」ブータンにも行ってきました。マイペースの開国で知られるブータン王国の棚田、さらなる開国でブータンの農業は衰退してしまうのかどうだろうかという思いがあり、行ってきました。ブータンの話も後で時間があれば少しだけしたいと思います。貿易理論で言うと、こんなことも考えてみたらいいです。貿易自由化で歴史の流れは輸送費を低下させる方向に来ている。人や物やお金の輸送が自由になり安くなっています。格安航空チケットなどインターネットの発達でどんどん輸送費が歴史の流れとして下がってきている。

そうすると実は、これはノーベル経済学賞を取ったポール・クルーグマンという方が提起した経済モデルですが、まず昔は輸送費が高かったということを描いた。山ひとつ越えることも難しいような「輸送費の高い」社会だと、図の縦軸に0.5と書いてありますが、山を隔てて2つの村社会の規模が半分(0.5)ずつということで、それが(輸送費の高さのため)自然なことだった。(図7)ところが日本では明治以降、差が出てくるようになった。東京一極集

中で、All or Nothing 0か1かということができて、この最先端の理論によると、輸送費が真ん中ぐらいただと極端になり一極集中になってしまうらしいのです。それで東京に来る人が多いのです。そして現在、大阪は衰退するかどうかという議論になっています。あるいは鳥取はどうか、島根はどうか、そうするとその産業はどうなるのだろう、幸福はどうなるのか。ところがさらに(横軸で左に向かい)輸送費が下がって、たとえばリアモーターカーなどができると、今度は別に東京に住まなくても行きたい時に行ければいい。だから最近東京を去って鳥取などに戻りそこで生活、あとはネットで仕事をする在宅勤務という話が出始めている。

つまり輸送費がさらに(横軸方向で)下がれば、また再び分散型社会(2ヶ所が繁栄する状況)、モデルであれば経済活動のシェアが0.5(半分)ずつ、All or Nothing 1か0かという一極集中ではない社会の在り方は、この最先端の理論で言うと、より輸送費を低くすればそのようになるというお話になるのです。話にふくらみがあった方がいいと思い、このような理論的なお話もしました。フェアトレードとビジネスと開発の課題、フェアトレードはアヒンサー的な政策であると思います。それから(一極集中でない)複数均衡を可能にする。つまりいろいろな村が繁栄するためには、輸送費をさらに下げていくことがやはり大事です。だから最新の理論もテクノロジーも実は幸福追求に活用しよう、両立しようということです。

ノーベル賞学者スティグリッツとグローバルな幸福

次はスティグリッツの話です。この方は情報の経済学で有名な学者(やはりノーベル経済学賞を受賞)で、ぜひみなさん大学で勉強していただきたい。情報の非対称性があると、なかなか均衡の取れた経済発展にならないので、なるべく情報の非対称性をなくす方法をしましょうという提案がスティグリッツによってなされています。GDPが低い国からの輸入品にはなるべく関税をかけないという具体的提案です。けれども、残念なことにそれは先進国の協力を得るのが難しい提案です。先進国としては、我々こそ途上国に関税を撤廃しても

らい、どんどん輸出したい、と主張するのです。そこで今後は貿易の自由化を巡っては市民と開発援助機関の共同や連帯が必要なことではないかと思います。より包括的な社会の幸福ということでは、実はこの発表では物やサービスの消費が拡大する、つまりYが大きくなるという話をしましたが、そのことは大事なことです。人間の身体は財の消費で維持されるので、これ自体は大事なことです。

小林先生の話にありましたが、主流派の経済学の源流は、イギリス人哲学者のジェレミー・ベンサムらの功利主義にあります。財の消費などで個人の感じる「快適さ」の合計をなるべく多くすることがその社会の幸福に繋がるということです。千葉大のカリキュラムにはそのような功利主義の観点による科目が(私のものも含めて)あるわけですが、それも活用しながら、さらにフェアトレードの概念や空間経済学、情報の経済学などを駆使することで、物質的な意味でも幸福に繋がられないだろうか、という話を私は考えています。

同時に財の消費量を外から観察して測定可能なものを合計するのは確かに政策に直接使えます。外から観察できるものは測れます。小林先生たちとの研究では、「測る」ということが重要になってきます。どのように幸福を測るか。功利主義ではパンの量やバナナの量など外から測れるので、経済学は今まで功利主義の方向で発展してきたという一面があります。けれどもそれだけではありません。「人はパンだけで生きるのではない」。これは聖書に書いてある言葉です。人はパンだけで生きるものではなく、やはり内面的なことも非常に大事だ。国連でも、私も昔、国連に少し勤務していましたが、Millennium Development Goals (MDGs) ミレニアム開発目標、続編として Sustainable Development Goals (SDGs) 持続可能な開発目標、ということで、より包括的な意味での開発つまり幸福追求が提唱されてきています。

ミレニアム開発目標 (MDGs) はこの15年間、SDGsは去年からですから、この幸福という考え、開発ということは、今後も国連などを通じてより数値化や内面のことも含めて計測していこうという方向になるでしょう。小林先生のお話に戻りますと、今後幸福度ということをなるべく測る、どのような時に人

図8



は幸福なのか、貧困という状況はどのような状況で、幸福とはどのような状況でポジティブな幸福になるのだろうかという研究は大事だということです。

さらにブータンについて

番外編としてさらにブータンのお話をします。これは私がブータンに行って買ってきた服です。ゴ (Gho) という名前の服で、ブータンの民族服です。女性ものはキラ (Kira) といいます。Gho を着て、本来は長めの靴下をはかなくてははいけないのですが (今回は省略)。そして、Gho の裾をこのようにたくし上げます。これがブータンスタイルです。(図8)

これがまさにブータンの民族衣装で、なるべく西洋化をしないで民俗的のものを大事にしようというのがブータンという国です。これ一着で幸福な国です。ブータンスタディーツアーに行ってきたわけですが、そこには「もうひとつの豊かさ」がありました。インドと中国の間の小さな国で拳骨をひっくり返したようなかたちの国です。拳骨の高いところがヒマラヤ山脈です。

なぜブータンのような小さな国が世界で注目されているのでしょうか。人口も66万人と少ない。平均寿命66歳、識字率60%程度で、決して高くない。GDPも1,800ドルくらいで南アジアの平均より少し高いくらいです。人間開

発指数は世界 133 位などになってしまう、なぜかと言うと所得が低いからです。教育もあまり充実していない。しかし人々は幸福を感じている。90%以上の人が「私は幸福です」と言っている。なぜだろうと思ひ、ブータンに行ってきたわけです。

Gross National Happiness (GNH) 国民総幸福というものは、人間は物質的な富だけでは幸福になれず、充足感も満足感も抱けない、そして経済発展及び近代化は人々の生活の質及び伝統的価値を犠牲にするものであってはならない、という信念で、1976年に当時のワンチュク国王が言ったことです。このことがあって、今ブータンという国は非常に有名になってきている。GNHが有名になってきているということです。政策の関係は先ほど出ました。文化の保護やよい統治、環境保護などにとっても関心を寄せ、たとえばGパンなどよりゴヤキラという伝統衣装を着ましょう、ということ強調する国です。Quality of Life 生活の質をとっても重視している国ともいえます。

どのようにして内面の Quality of Life を測るか、これからの最新の研究課題だと思います。ブータンの所得は低いですし、食べ物もそんなに豊富ではありません。ところが、写真で、あのマッシュルームに見えるものは松茸です。松茸が安かったです。国が違ふとこんなに価値観が違ふものかということもブータンで思いました。ゴヤキラを着て、なるべく自給自足を目指す。それができない場合は輸入します。生活＝仏教や伝統を重んじ、90%以上の国民が幸福と思っている。最近ではもしかしたら西洋化によってブータン的な価値観が崩れているかもしれないという議論がある。このことも今後研究できたらと思っています。お寺を回りながらマニグルマを回すとお経を1回読んだことになる。これが幸福な瞬間です。私はこれをしながら死んでいきたい、とお寺で会ったおばあさんは言っていました。(図9)

ブータンでは、西洋化の流れでゴミ問題も出てきている。昔はポイ捨てしてもバナナの皮は土に返った。今はポイ捨てしたらゴミになってしまうという問題が出てきています。幸せの国ブータンがどのように近代化と折り合いをつけて貿易もある意味発展させながら今後やっていくのだろうかということを考え

図9



ながら帰ってきました。いろいろな話をしましたが、ぜひ今後も幸福について研究していきたいと思います。